

平成 19 年 11 月 9 日

目録所在情報システム更新に対する要望について

国立大学図書館協会

1. 今後の大学図書館システムと利用者サービスの方向性

デジタル情報環境下における利用者サービス機能の強化を第一の目標ととらえ、大学図書館システムが進むべき方向性について、次のように整理した。

(1) 電子リソースのアクセシビリティを高める

学術情報の電子化が急激に進行するなかで、大学図書館が取扱う電子ジャーナル等、電子リソースのタイトル数が非常に増大している。利用者が電子リソースにできるだけアクセスしやすい仕組みを構築し提供することは、大学図書館にとって重要な課題である。電子リソースのメタデータ管理、ライセンス管理、アクセス管理等を効率的かつ適切に行ない、それを利用者サービスに活用していくことが必須である。

(2) 孤島のシステムからブリッジ型システム・ユビキタスな図書館へ

今後の大学図書館システムは、個別の図書館サービスの中で完結するのではなく、図書館の壁を越えて資料や情報を発見し入手手段へと導くブリッジとしての役割を重視し、外部サービスとの連携・融合によって、利用者の利便性向上を目指す。さらには、外部サービスに対して図書館サービスを開放することにより、利用者がネットワーク上のさまざまな場所から図書館サービスにアクセスできるようにするべきである。

(3) 利用者が一次情報に到達できるサービスを

利用者にとって、電子リソースが居ながらに入手可能であるなかで、紙媒体資料入手の煩雑さが一層際立って感じられるものとなっている。将来的にはすべての資料が何らかの形で電子化されて、利用者自身が直接電子的にアクセス可能となることが理想であるが、それが実現するまでの間、文献提供サービスとしての ILL は引き続き重要である。さらに、大学図書館は ILL という枠を超えて、利用者がシームレスに一次情報へ到達できるように、文献の電子的デリバリー等も含めた利用者個人への直接サービスを指向しなければならない。

(4) 書誌・所蔵データ作成のワークフローの再構築

出版社やオンライン書店等の業者による多様な書誌的情報がネットワーク上に流通して

いる現在、大学図書館はこれを活用すべく書誌・所蔵等のデータ作成（入手）のワークフローを見直し、再構築しなければならない。例えば、NACSIS-CAT と業者間での大学図書館購入資料の書誌・所蔵データ交換、大学図書館と業者間での契約データ交換、大学図書館と NACSIS-CAT での詳細な所蔵情報交換が可能となるような共通プロトコルを定め、データ交換をシステムに任せることによって省力化を図っていく必要がある。

（５）ASP・SaaS*モデルの図書館システム

図書館システムが複雑化し高額になっていく一方で、職員及び予算の削減が進んでおり、特に中小規模の図書館においては図書館システムを自前で調達し、維持・管理することが困難になっている。システム調達・維持のコスト削減のために、ASP・SaaS モデルによる図書館システムを実現し共同利用していく必要がある。

* ASP（Application Service Provider）、SaaS（Software as a Service、ソース）：

ネットワーク経由でソフトウェアの機能を提供するサービス。顧客はブラウザでセンター等のサーバで動く業務ソフトを呼び出して利用する。

２．NII に対する要望事項

大学図書館が以上のような方向性でサービス機能の強化を図っていくために、NII には次のような役割を担っていただきたい。

（１）電子リソースの管理機能の提供

【要望内容】

中央集中型ナレッジベースを核とした電子情報資源管理システムを導入あるいは開発し、ASP・SaaS モデルで提供する。本システムは、出版社等から必要なデータを一括して取り込む方式（一種の川上方式）であることが必要である。また、NACSIS-CAT/ILL との相互運用性を実現し、紙媒体資料と電子リソースが別管理となっても、リンク機能を用いたシステム間連携や横断検索によって、検索ユーザの利便性を確保する。実現時期は、平成 21 年 4 月のシステム更新時とする。

【要望理由】

NACSIS-CAT は紙媒体資料の取扱いを前提としたシステムであり、電子リソースを管理するには不向きである。しかし、各大学が個別に電子情報資源管理システムを整備することは、費用や労力等の点で極めて困難かつ非効率的である。電子リソースの管理やリンクリゾルバ等の運用に必要なナレッジベースは、NII、情報システムベンダー、出版社、各大学等が連携しなければ維持することが困難であり、NII が書誌ユーティリティとして目録所在情報サービスの取扱い対象を、紙媒体資料から電子リソースへと拡大することを期待す

る。

【期待効果】

各大学図書館は、これまで個別のシステムで行うほかなかった電子ジャーナル等の管理を標準的かつ効率的に行うことができ、総体としてコストが削減でき、全国レベルで電子リソースについてサービスをレベルアップさせることができる。NIIにおいても、電子リソースに関する大学横断的な新サービスの展開を図ることが容易になる。もしNIIが導入するリンクリゾルバをASP・SaaSモデルで各大学が共同で利用できれば、これらの効果をより高めることができる。各大学のライセンス情報を一元的に管理し、NACSSI-CAT/ILLとの適切な連携を図ることによって、特にILLにおいて効率的な電子ジャーナルの利用も可能となる。さらに、電子リソースに関する統計も共通化することができる。

【大学図書館の課題】

今年度行なわれているERMS実証実験の推移を見守り、ERMS導入が本当に有効か否か検証結果を注視する必要がある。

(2) 総合目録データベースのデータ開放と外部サービスとの連携

【要望内容】

総合目録データベースをWebサービス化するとともに、データを検索エンジンに開放し、NII内外のサービスとの連携・融合を促進する。また、一次情報へのナビゲート機能を充実させる。具体的には以下の機能を実現する。実現時期は、平成21年4月のシステム更新時とする。

APIを公開し、外部サービス等から目録所在情報を活用できるようにする。

CiNii、JuNii+との連携によって、論文DBや機関リポジトリなどとの統合検索や相互リンクが行えるようにする。

各館OPACや書店サイト等外部サービスとのWeb連携を実現する。

OpenURLに対応し、リンクリゾルバのリンク元(ソース)、リンク先(ターゲット)として設定できるようにする。

WorldCatと同様にGoogleへのデータ開放を行い、利用者が慣れ親しんでいる検索インターフェースから総合目録データの検索を行えるようにする。

紙媒体資料と電子リソースの一括検索・表示を可能にする。

大学個別版OPACを提供可能とする。

図書・雑誌の表紙イメージ、本文イメージ、目次情報を出版社等から取り込み、提供可能にする。

所蔵図書館一覧の絞込み(自館、近隣図書館等)を可能とする。

国外の図書館システムや外部のWebサービスとの連携を容易にするために、MARC21やXML等の各種フォーマットによるデータ出力機能・外部システム連携機能を装備

する。

日本語版を含め Webcat 全体を多言語対応版に変更する。また、多言語データに配慮した表示を実現する。

【要望理由】

現在の Webcat 及び WebcatPlus は、既定の画面インターフェースから紙媒体の図書・雑誌単位の書誌情報を検索できるだけであり、論文単位の情報には他のデータベースを、電子リソースは個別大学のサイトにアクセスしなければならない。図書・雑誌単位と論文単位など、情報の粒度を超えた検索については、NII がデータを統合するのか、大学図書館側の統合検索の仕掛けで実現するのか等検討が必要である。

【期待効果】

総合目録データベースを NII 内外のさまざまなサービスと連携・連動させることにより、利用者の利便性を向上させることができる。外部サービスの中に総合目録データベースの入り口を設定できれば、目録所在情報の視認性が高まり、総合目録データベースの効果的な利用を促進することができる。

【大学図書館の課題】

総合目録データベースのデータ開放によって、特に一般学外者からの蔵書利用要求が拡大することが予想されるので、大学図書館側のコンセンサス形成が必要である。

(3) ILL の機能改善と直接サービス化

(3-1) ILL の機能改善

【要望内容】

NACSIS-ILL の所蔵館検索機能を向上させ、単価、手数料、カラー、DDS、電子ジャーナル受付可否等の受付館ポリシーを検索可能とする。また、電子伝送許諾出版物か否かが判別できるようにする。実現時期は、平成 21 年 4 月のシステム更新時とする。

【要望理由】

NACSIS-ILL は、平成 18 年度にはじめて文献複写依頼件数が減少に転じたとはいえ、大学図書館の ILL サービスを支えるシステムとして依然その重要性は変わらない。国立大学法人化以降、受付館ポリシーが多様化しているため、きめの細かい所蔵館検索機能がなくては条件に合致した所蔵館に到達できなくなっている。

【期待効果】

ILL 業務の効率化、ILL サービスの向上が期待できる。

(3-2) ILL の直接サービス化

【要望内容】

利用者が目録所在情報を利用して、直接各所蔵図書館に対する図書借用や文献複写の申

込みが行える機能を設ける。複写については、文献の電子的デリバリーへの対応も視野に入れる。また、この仕組みの実現に必要な共通的なユーザ認証機能を用意する。平成21年4月以降の実現を目指す。

【要望理由】

利用者は、最小限の労力で、できれば仲介者を経ることなく、速やかにコンテンツを自分の手元に入手したいと考えている。このようなニーズに応えるためには ILL の利用者個人に対する直接サービス化が必要である。

【期待効果】

利用者は、自分の所属する図書館を経由しないで、所蔵館に対して直接、図書借用や文献複写を申し込めるので、手続きの簡略化と所要時間の短縮化が可能になる。

【大学図書館の課題】

利用者個人から料金を徴収する仕組みが必要である。さらに、文献の電子的デリバリーサービスを行なうには、公衆送信権について権利者の許諾を得なければならないので、包括的な権利処理ができるような仕組みを構築する必要がある。

(4) 総合目録データベースのあり方の見直し

(4-1) 書誌情報形成における川上方式について

【要望内容】

出版社や取次ぎ、書店等、情報の発生源に近い場所で形成された書誌的情報を NACSIS-CAT でそのまま利用できる書誌データとしてプリセットする方式(川上方式)について、実験・試行を行ないながら、その実現可能性を中期的視野で検討する。なお、これらの書誌的情報は、参照ファイルとして利用するのではなく、総合目録データベースのレコードそのものとして取り込む。また、川上で取り込めない書誌データについては共同分担方式を維持するが、拠点方式等効果的な入力方法を検討する。

【要望理由】

現在では図書館の作成する目録情報よりも早く、出版社や取次ぎ、書店等の作成する多様な出版情報がネットワーク上で流通しているにもかかわらず、図書館で目録作成と書誌レコード調整に時間と労力をかけることは、客観的に見て図書館外の理解を得ることが困難になっている。一方、川上方式を採用することは、目録作成ルールの思い切った見直しなど運用上の変更が非常に大きいことを十分に踏まえて検討する必要がある。また、所蔵リンクのある資料のみを ILL の検索対象とする機能を用意するなど、システム上の変更も必要になる。

(4-2) 所蔵情報のあり方について

【要望内容】

総合目録データベースが現在のような形で所蔵情報を保持すべきかどうかについて、中期的視野で検討する。総合目録データベースは書誌データのみ維持し所蔵情報を各大学 OPAC に委ねる（但し、シームレスな参照を可能にする）のか、詳細な所蔵情報自体を総合目録上で持ってしまうのか、あるいは、所蔵情報を保持するとしても各大学 OPAC の所蔵データをハーベストするのか、さまざまな可能性が考えられる。

【要望理由】

総合目録データベースの所蔵データはそれ自体で完結しない不十分な情報であり、例えば図書 1 冊単位の管理が行なえるわけではない。ILL 依頼や実際に図書を利用する際には、個別大学の OPAC を検索し詳細な所蔵情報を参照しなければならない。今後も総合目録データベースと各大学の OPAC とで、異なるレベルの所蔵データをそれぞれ保持し続けるのか、見直しが求められる。

(5) その他

多言語への対応をさらに進める。新たな言語・文字への対応に伴うインデックス仕様の変更に対しては、既存データのインデックス調整も行なう。

不要な ILL 依頼を避けるため、オープンアクセス文献の入手効率を高める機能を充実させる。

なお、大学図書館としては、今後 ASP・SaaS モデルによる図書館システムの実現を目指していく必要がある。実現するシステムは、業務処理の標準化を推進する中で仕様の共通化を図り、OPAC、蔵書管理、貸出管理、DDS、及び機関リポジトリ等、機能毎にモジュール化されていることが前提となる。NII がこのようなシステムの構築・運用に関与する可能性も含め、NII と大学図書館とが連携して、実現への筋道を検討していく必要がある。